

シリーズ

研究の動向 59

■ 武庫川女子大学近代衣生活資料

—有形民俗文化財登録までの経緯および当資料活用による研究の可能性—

武庫川女子大学 横川 公子

1. はじめに

「武庫川女子大学近代衣生活資料（以下、近代衣生活資料とする）」は、2019年度に、国の登録有形民俗文化財として登録された。本稿では、本誌からご依頼いただいた機会に、主として当資料の内容と登録までの経緯、当資料活用による研究の可能性について、ふれさせていただく。こうしたことが、衣服や衣生活を学術的に探究するうえで、いくらかでも参考になれば幸いと思う。

近代衣生活資料は、普通の人々の和装を中心にした衣生活の資料群である。普通の人々とは、身近な等身大の人々を指し、近代になって拡大した都市に生活する人々が着用してきた衣類と、それを作り出す道具類や着装を支える小物類、そうした営み全体と関わる教育資料などを含んでいる。総数にして2,518件(9,092点)になる。

本稿では、「近代衣生活資料」の形成から登録までを視野に入れて、その経緯や資料の活用とその広がりについて報告したい。

2. 武庫川女子大学附属総合ミュージアムについて

2020年2月25日に開館した武庫川女子大学附属総合ミュージアム（以下総合ミュージアムと称す）は、1994年に創設された武庫川女子大学資料館（旧資料館と称す）を受け継ぎ、それに文書資料の収集保管と周年史編集を担当した旧資料室を合併して開設された大学ミュージアムである。開館の主旨は、基本的に旧資料館を踏襲している。旧資料館開設の主旨は、「より豊かな情操教育を目指して学院開設（1939年）以来収集してきた美術品と、

昭和60（1985）年代以来、幕末・明治・大正・昭和時代の生活文化と人々の英知と情感に接することを目的として収集してきた民具資料を基盤とし、その成果を、展示を通して公開する」というもので、言い換えると、当館は、展示を通して、美術工芸に接すると同時に、近現代の普通の生活を知らしめることを目指してきた。また女子を対象とする高等教育を意識したもので、当該資料群は、教育標本資料として出発しているといつてよい。また近代衣生活資料の登録は、こうした基本的取組みの成果の一つとして位置づけることができる。

以上のような歴史と機能を受け継いだ総合ミュージアムは、大学ミュージアムとしての基本的スタンスとして、「大学における高等教育・研究の成果を保存・活用する」附置研究所の機能を有する機関として再出発した。「武庫川女子大学近代衣生活資料」は、生活環境学部生活環境学科の衣環境領域における教育と研究成果の一つでもある。

3. 収集の経緯

登録された近代衣生活資料のうち、旧資料館開設時に収集されたのは、業者から民具として購入されたものであった。当時の主な担当者は学部には所属する衣服関係の専門の教員であり、必ずしも学芸員としての対応ではなかった。但し運営委員長は民俗学の専門家であり、その見識が、着物を民具に仕分けたことに反映していると思う。当時の生活環境学部には所属する教員が、技術教育の一環として和裁で扱われていた着物類を、民具として仕分けることには何かしら違和感があったのではないかと思われる。無名の人々が着るものという意味では、普通の着物は、民具として仕分けられる《着るもの》と同じように見える。しかし具体的な素材や文様・色合や、実際に着るうえでのTPOに注目すると、民具とは異なるもののように思う。この点は、近代衣生活資料を特徴づけるものであり、のちに触れる。

収集の経緯にも、その差が見えてくる。近代衣生活資

Kimiko YOKOGAWA

武庫川女子大学 名誉教授・特任教授

附属総合ミュージアム 館長

〔著者紹介〕(略歴) 1994年から生活環境学部教授・生活美学研究所・女性研究者支援センター兼務を経て現職。2002～2005年、国立民族学博物館客員教授。著書に『服飾表現の位相』(昭和堂)、『服飾を生きる—文化のコンテクスト—』(化学同人)、『衣と風俗の100年』(ドメス出版)、『大村しげ 京都町家ぐらし』(河出書房新書)、ほか。

〔専門分野〕日本服装史/生活美学

料の収集が促進されたのは、阪神淡路大震災(1995.1.17)と、それに先立つ都市化に伴う宅地開発が進んだ時代に行われたこととも関係している。当時、大都市近郊では、宅地開発によって土地を手放した旧地主層が住居の新築や改築を進め、蓄積してきた衣類や道具類が放出された。それに伴って大阪市天王寺のウエス屋には、回収された古着類がうず高く積み上げられていたという。その後の古着ブームに火を点けることになる状況だ。そんな中からモスリンの衣類や裂を収集してコレクションを作り上げた事例を挙げる*1。

また阪神淡路大震災による罹災を免れた道具類や衣類が廃棄されたり、古物商に買ったたかれたりしていた。こうした状況に、暮らしの崩壊の危機を見た主婦のグループによって、西宮市の北部に「くらしのきもの資料館」*2が立ち上げられ、普通の人々の着物が収集されることになった。普通の着物を扱うという趣旨は、旧資料館の設立趣旨とも、衣環境領域の対象としても共通である。「くらしのきもの資料館」で収集された着物類は、最終的に旧資料館に寄贈されたが、当館は、資料の整理の仕方等、アドバイスすることで協力体制をとった。つまり近代衣生活資料は、旧資料館の収集資料と「くらしのきもの資料館」からの受贈資料、さらに当館が個人から直接受贈した資料によって構成される(表1)。

こうした経緯の中で見えてくることは、近代衣生活資料は、美術品や特別な宝物でも、作品というようなものではない。かつて毎日の暮らしの中で所持し、使い、手入れされ、眺められていた物であり、毎日の暮らしに凝縮された生活文化を担った物たちなのだ。そういう着物が、登録文化財になることで、未来に引き継ぐべき貴重な文化遺産として位置付けられたのである。

表1 総合ミュージアム収蔵の着物

収集者	寄贈(収蔵)数	受贈先
旧資料館(開設時)	約600件	古物商(購入)
くらしのきもの資料館(経由)	約3,400件	個人 約200人
総合ミュージアム及び同準備室		個人 約50人
合計	約4,000件	

近代衣生活資料に収束した具体的な収集品の内容は着物だけではない。衣生活の全体像が分かるような多様なものに及んでいる。同時に、寄贈者からは、それらにまつわる想いが語られることも多く、むしろ積極的にそうした思いや体験・エピソードなどを収集している。基本的な調書では、これらのすべてについて記録することをめざした。

調査・研究対象としてどのように取り組んでいるのか

をまとめると以下ようになる。

調査① 受贈前の現場調査とインタビュー調査

遺品・資料にまつわる見聞・着用体験・所持への感想(使い方 入手・所持の仕方)等々の収集

調査② 受贈後の基本調査と展示のための関連資料・文献の調査(美術工芸品と共通)

調査③ 調査者の関心によって、モノにみる美的・倫理的こだわり・用途・着装の仕方等々について分析

調査の基本的な視座は、物自体の観察結果の情報化とともに、普通の人々が着物に込めた想いを発掘することにある。

4. 何を収集したのか

実際に収集されたのは、以下のようなものである。

- ・着物標本資料は和装を構成するもの(収蔵品には長着・羽織・帯が多い)
 - 外衣・內衣・下着, 上半身衣・下半身衣・全身衣・附属品
 - 長着・羽織・長襦袢・帯・紐・附属品(半襟・帯揚・帯締・羽織紐)・履物
 - 服飾小物(足袋・肩掛・髪飾・手袋・袋物・ハンカチ・袱紗・風呂敷)・裂・反物
- ・関連品(和装を支える道具立て・仕掛けとして)
 - 裁縫道具(ミシン含む)・家具什器(裁縫箱・小袖箆筒・鏡台等)
 - 裁縫教育に関するもの
 - 裁縫雛形・型紙(図案・下絵)・裁縫部分縫い等
- ・標本資料としての判断を支える暮らしの現場での思想の収集
 - 自分の人生と重なるような捨てがたい着物・遺品・大切に保存してきたもの等々の物にまつわる物語

近代衣生活資料に収束した具体的な収集品の内容は、衣生活の全体像が分かるような多様なものであり、着る物や付属品に届まらない。

なお、近代衣生活資料が登録民俗文化財に登録されてから、寄贈の申入れが相次ぎ、現在はさらに収蔵数は増えている。

5. 基本的な視座

要約すれば、普通の人々が残したいモノは何だったのか。人々はどのようなモノを求め、どのように使っていたのかに関して記録した。ここで普通の人とは、渋沢三の「常民」という考え方が参考になると思う。但し、収集されたものは、上述のように、渋沢らとは収集の時

期が異なることによって、異なる様相を呈している。それについては後述する。渋沢の主張はアチックミュージアムに集約されている。具体的にいうと、瀬川清子の次の文章が参考になる。

衣服は、デパートからと云ふが、農村の仕事着は、デパートなどには並んだことがないし、又國民の服装の主たるものとして、教科書にも取り上げられたこともなかつたかと思われる。雑誌文化などに参加する人々も農業服には、餘り関心を持つて居られないかもしれないと思ふが、併し、五十年か七十年前の日本は、農本国であつて、國民の大部分が、野良に出て仕事をして居つたといふ意味で、農村の着物は、我が國の代表的な國民服であつた。其の後、商工業が大きな発展をして、日本は商工業国と云われるやうになつたが、それでもまだ、國民の半分は農業生活に従事して居るから、農業服を着る人は絶對多数なのである。それに、今日の商工業の先駆者であつた行商人、職人の服装も又、これと共通な形・色合・品柄を持つてゐるので、つまり日本の働きのある着物が、ここにあつたのである¹⁾。

瀬川清子は、デパートに並んだ衣服や、教科書に取り上げられた衣服、雑誌文化に参加する人たちが言及する衣服が別にあることを把握しながら、日本の代表的な服装は、農村の仕事着だとする。このことは、渋沢敬三の民具学の魁となつたアチックミュージアムで収集された物の特色にも通じることであつた。瀬川による、上記の文章執筆時から遡ること70年とすれば、明治期はじめのころの國民服が想定されていることになるが、かれらが注目するのは、近世の所産としての働き着に当たるわけである。旧資料館が目指した、幕末・明治・大正・昭和時代の生活文化を発掘するという視座とも、その始まりの時期において通じるところがある。しかしこれらは、当館が普通の人々からの寄贈によって集めた、近代の都市生活で用いられた近代衣生活資料とは、ほぼ重ならない。

さらに、渋沢や瀬川とほぼ同時期に民俗資料に注目していた本山桂川は以下のように言及する。

自序 服飾の問題について、民俗学的に検討せんとする場合、その観察の目標は、民間の服飾におかなければならない。また國民服装の改善と確立のためにも、この常民の服飾が、如何にして今日の如く雑多な形態にまで発達し伝統されたかを知ると共に、各地に現存する服飾習俗と儀禮と、これに伴ふ生活様式の各般に互り、過去において、それが如何

なるものであつたか、また如何に伝承され、或いは、如何に変遷し、如何に変化されたか。さうして更にそれが、われわれ常民の服飾として、如何に使用され、如何に応用され、如何に影響されてゐるか。……調査と考察の視野は極めて広範囲に、多岐複雑となつて来る。

従来わが國の服飾については、有職故実に基く上流社会の記録こそ少なくないけれども、民間のそれについては極めて乏しいのを遺憾とした²⁾。

本山は、自序に続いて、常民服装の変遷として、何を着ていたのかを取り上げる。そこで取り上げられたのは、常民の服飾であり、現代日本で代表とされている着物ではないし、当館に寄贈されているような流行の着物でもない。各地方で使われていた働き着も含む常民の服飾なのである。当館が所蔵する都市生活における衣生活とは別の趣を持った服装が注目されているのである。

こうした視座について、渋沢敬三による次の文言で締めくくることができる。

常民とは庶民、衆庶等の語感を避け、貴族、武家、僧侶階層を除くコモンピープルの意として用い出せるもの。農・山・漁村のみならず市街地を合わせ農工商等の一般を含むものとして敬三の作出にかかる³⁾。

渋沢は、市街地の人々の暮らしも視野に入れていますが、アチックミュージアムは、貴族・武家・僧侶などを除いた常民に関するものを収める博物館となる。実のところ、東京帝室博物館は、1925年、動物・植物・鉱物といった自然史標本が東京博物館（現在の国立科学博物館）に移管されたあと、「皇室の博物館」として公家や武家・社寺の宝物といった上層階級のモノを展示する博物館となる。そして東京帝室博物館とアチックミュージアムは相補的關係となる。

翻つて当館は、普通の生活資料を収集し、そこから炙り出せる先人の知恵と情感に触れることを目指してきた。このことによって、常民の服飾とも有職故実に基づく上流社会のものともことなるその中間に位置する普通の人々の生活文化に注目することになったのではないかと考えている。

6. どういうことがわかって来たか。

旧資料館では、受贈された普通の着物を調査し、その成果として展示を企画・開催してきた。ざっと一覧すると、次のようになる。()内の数字は、展示を実施した年度である。

生活文化玉手箱シリーズ

- ①キモノの文字文様に託された世界 (2010)
- ②共感のちから無名のちから—明治・大正・昭和を生きた人々の手芸品 (2011)
- ③色香り街に咲くキモノの華物語—明治・大正・昭和のお召を中心に— (2012)
- ④花を着る—着物に託された花鳥風月— (2013)
- ⑤きものに寄せられた物語—モダンへの賛歌と着こなしへのこだわり— (2014)
- ⑥編みの造形への挑戦—山口比呂の作品と手芸教育の現場から— (2015)
- ⑦近現代のきものと暮らし—技術革新の成果と新しい担い手の成立— (2017)

以上のような旧資料館の企画では、いろいろな視点から、暮らしの中で使われてきた着物類を取り上げてきたといえる。タイトルにも反映しているが、着物をはじめとする生活文化資料は、普通の暮らしに蓄積されている様々な価値や夢、幸せの可能性を孕んだ宝庫であり、玉手箱のようなものである、というのが、シリーズ命名のコンセプトである。着物に託された世界、寄せられた物語という文言によっても、着物は語るものであり、生活の軌跡、担い手、暮らし、時代の空気感や拘りを反映し、明治・大正・昭和を生きた近代のモダン生活を炙り出してくれる。序文⁴⁾によって展示の趣旨を要約すると、下記のようなものである。

- ・生活文化資料（服飾資料を含む）は、私たちが暮らしていく上で必要なすべてのモノを含みます。私たちの暮らしを取り巻くモノは、それらの一つひとつが、文化や歴史の証人として拠り所となるものです。これらのモノは、美術品でも特別な宝物でもない、ありふれたモノです。
- ・生活するということは、あらゆる価値と行為を含んだ総合的な営みです。暮らしを支え、彩るモノとモノにまつわる事々には、多様な価値と未来的な可能性がしっかりと織り込まれているのです。
- ・生活文化資料は、普通の暮らしに蓄積されている様々な価値や夢、幸せの可能性を孕んだ宝庫、玉手箱です。

いいかえると以上は、価値の発掘の可能性を表明するものである。

7. 資料調査の可能性

当館では、収集された資料（衣類）には、整理番号が付けられ、写真撮影され、寸法が測定されて、一つ一つ手に取って調書に記録される。資料名・形態・色・柄・材質・個数・法量・機能（使用目的）・使用年代・使用地域などのほか、使用状態や破損などの言語化できる情報や寄贈者との関係など、出来る限り備考欄に記述される。

一方、民俗文化財への登録情報として求められたのは、まず全体像を把握できる資料の分類と範疇毎の数量であった。そこで資料全体の分類には、より客観的な判断が可能な形態分類を採用した。それによって、モノ（マテリアル・標本資料）から看取できる事柄に関心が集中することになった。一方、そこで浮上した問題は、形態分類の合理性と限界の問題であり、当該資料分析の方法や適切性を見直す機会となった。着物の場合、形態分類ではその意匠に関する情報はこぼれ落ちる。また、意匠に伴う美的価値づけや範疇に関する直感的な判断も後方に退く。

訪問着・外出着（街着）・普段着・礼服といった用途についても不確かなものの一つであった。用途の判断基準については、地域や着用者の立場等に応じて共有されたドレスコードとして、ほぼイメージはあるものの、制服のように決まりがあるわけではない。たとえば、昭和戦前期の衣資料として特徴的な銘仙は、普段着からちょっとしたおしゃれ着に分類されることが多い。しかし生活の現場に立ち入る、つまり実際に着用した人々の着衣の体験や記憶によって一様ではない。例えば、ほぼ一生を着物で過ごした大村しげは、京都の町では、つねぎは働き着でもあり、大抵銘仙という平織の絹物を着ていたという。一方で、それは娘さんや奥さんと決まっていて、〈おなごし〉さんの常着は木綿、しかしお使いに出るときには銘仙に着かえる⁵⁾という。用途は必ずしも基本的な形態分類とはかさならない。資料の形態分類は、その存在を証明するうえで有意義であるが、物自体への学術的関心を掻き立てる上では寡黙ともいえる。課題に沿って資料活用する際、改めて地域や着用者の想いや価値判断など、いわば〈見えない関係性〉を発掘することになる。このことは、資料調査の可能性を示唆することに他ならない。

改めてモノとしての資料が訴えてくる諸々について、整理してみたい。資料名「長着」には中分類として「女裕」「女裕間着」「女単」「男裕」「男単」「女児裕」「女児単」「男児裕」「男児単」を設定し、綿入もこの段階に入る。紋の有無や袖丈も用途や機能の重要な判断基準になるが、備考欄に記載される。形態分類における基本的要素は、寸法や構造による形態分類のほか、女物・男物・子供物のようなジェンダー、表衣・下着・肌着、上半身衣・下半身衣など着装の仕方、裕・綿入れ・単といった季節による着分け方の分類、色・柄・素材と使用目的・使用地域等については備考欄となり、資料とかわる文化的・生活的な要素は、二次的な情報として位置付けられている。以上が文化財登録上、求められた分類項目の内容との関係であるが、収集にかかわる地域情報については、武庫川女子大学所蔵品という段階で関西地方とい

うことが確認されているともいえる。以上のような分類による情報が、学術的調査に貢献するに足るか否かは、関心や問題意識に応じて開示されることになるだろう。

8. さまざまな研究の可能性

民俗文化財への登録に求められたのは、まず全体像を把握できる資料の分類と範疇毎の数量であった。資料全体の分類には、より客観的な判断が可能な形態分類の採用に帰着し、大分類から小分類までの樹木構造の位置づけを仮説的に作る必要があり、それによって全体像の把握が可能になった。そこで浮上したことは、前述のように形態分類の合理性と限界の問題であり、現実により近い当該資料分析の方法や適切性を見直すことも要請された。さらに資料写真によって把握できる情報は形態把握に留まらない。たとえば文様や色彩に関しては、具体的には極めて多様な展開が見られるが、形態分類には反映していない。

文様のモチーフに注目しても、当時、西洋花がモチーフとして多用されることは周知のことであるが、黒縮緬五つ紋付の婚礼衣装に、鳳凰と松と薔薇が取り合わされて裾文様になっているというような、伝統にこだわりながら、西洋風のモチーフを大胆かつ軽妙に混入させるようなことも見られる。例示した写真は、寄贈資料によるもので、大阪市心斎橋の呉服屋で調達されたという伝来がある、和歌山県かつらぎ郡花園村から寄贈されたものである(図1)。これとは別に広島県から寄贈された婚礼写真に、同じ文様の婚礼衣装を着用したのがあり、この類まれな一致には、必ずしも都会生活だけでなく、郡部まで普及していることが示唆されている(図2)。近代になって普及した写し友禅による量産によって可能になったものと思われるが、さらに視野を拡大して検証す

ることが要請される事例であろう。

また袖付け寸法や袖丈のような、着付けの仕方とも関わる項目についても、その詳細な把握は行われていない。普通の着物は、実際の暮らしのなかで着られ、手入れされ、作り直されたりしている。資料を丁寧に観察することで、これらの履歴についても知ることができ、着て生活する様態が炙り出せる。等々、多くの調査の可能性が示唆された。

9. 資料に見る趣味の地域性や時代性

近代衣生活資料に最も多く含まれるのは、大正期～昭和戦前期のものである。資料数が多く、多様な人々からの収集であることから、一点一点の検討のみならず、マスとしての趣味の特徴が自ずと浮かんできた。特に長着や羽織などの着物には、趣味の上での特徴があるように思う。西洋花のモチーフやアールヌーボーやアールデコ風の様式を取り入れた構図、正倉院風や有職風のモチーフや構図も多く認められる。洋風モチーフが、かつて中国から移入された鳳凰や牡丹と並べられる時代の感覚に、本山桂川のいう<雑然とした>という感覚があったのかどうかは、課題の一つであると思う。化学染料による鮮やかな色彩や関西地域の大柄な文様配置といった特徴も認められる。このように地域性や時代性を示唆する特徴が炙り出されてきた。

さらに100年を超えようとする資料群から、戦後の高度成長期における着物の再生を経て、今日に受け継がれた近現代の着物の在りようが浮かんでくるように思う。さらなる資料をめぐる関係性の発掘や、大学ミュージアムにおける学術標本資料としての意味についても、視野を拡大して探求することが要請されると思うが、今後の課題として検討する必然性があるのではなかろうか。

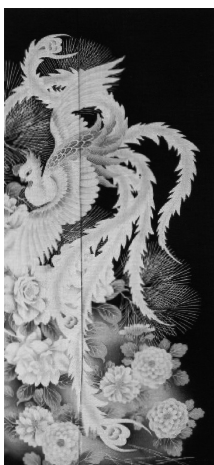


図1 婚礼衣装部分

(武庫川女子大学附属総合ミュージアム所蔵、花園村からの寄贈品)



図2 図1の衣装を着用した写真

(武庫川女子大学附属総合ミュージアム所蔵、広島県からの寄贈品)

10. 資料の関係性の発掘へ

普通つまり身近な等身大の馴染んだモノやことというのは、格別に取り上げて検討することや、意味があることとして扱われることは少ない。当館が収集し所蔵する衣生活資料は、こうした普通のモノを収集したところに独自の視点がある。さらに言えば、いわば物言わぬモノを収集していることになるのだ。しかし、こうした“普通の”モノも、それをめぐる様々な視点から調査・分析すると、多様な価値意識に満ちており、それらが浮かび上がってくる。物言わぬモノが、多弁な価値の宝庫へと変身するのだ。

こうしてみると、我々の周囲には、こうしたモノが満ち溢れていると思えてくるが、具体的にもう少し立ち入ってきたい。

脚 注

*1 「くらしのきもの資料館」代表の公庄れい氏が、文化服装学院に寄贈したことが知られており、その寄贈品受領書によれば、女物資料224点、男物資料53点、子供物資料32点、素材資料16冊、その他資料81点の計406点が、現在、文化学園ファッションリソースセンターに保存管理されている。

*2 「くらしのきもの資料館」は、2007年春に西宮市の北部、越木岩神社の西方に開設された主婦グループの非営利の資料館である。現在は武庫川女子大学旧資料館に収集品を寄贈し、閉館した。当資料館代表の公庄れい氏からの見聞によるが、公庄氏が収集したモスリン類は、現在、文化学園リソースセンターに寄贈されている。現在は使命を終えて閉館した「くらしのきもの資料館」の設立の趣旨は、「日々の生活で普通に使われていた普通の着物が、その記憶を持っている人たちとともに消えてしまう前に、残されたものを集め、保存し、分類整理し、展示に至るまでの準備作業を当面は行っていきます。……順次それらを公開し、庶民の文化を未来に引き継ぐ役割を担っていきたいと考えています。」(当時のHP掲載文の一部) というものであった。

文 献

- 1) 瀬川清子. きもの. 六人社, 1942.
- 2) 本山桂川. 服飾民俗図説. 崇文堂, 1943.
- 3) 網野善彦, 渋沢雅英編. 渋沢敬三著作集第5巻. 平凡社, 1993.
- 4) 武庫川女子大学資料館. 展示企画図録「①キモノの文字文様に託された世界」序文. 2010.
- 5) 秋山十三子, 大村しげ, 平山千鶴. 京の着だおれ. 東洋文化社, 1974, 86.